

私の香川大学、私の先生

津田 勝利 (学芸学部・美術科・昭和41年卒)

私の最も尊敬する先生が、昨日亡くなられた。すべてに影響を与えていただいた先生だった。大学に入り、初めて先生のお宅に描いたばかりの50号の絵を担いで伺ったとき、作品にはほとんど触れられず「あなたは、いつも何時間眠りますか？」と尋ねられた。思わぬ質問に慌てて「7、8時間です。」と答えた。「あ、そう」と云われ、すごすごと絵を担いで帰ったあの日。絵が良くないからかと、次は、相当頑張っって持っていったら、「あなたは、何か語学ができますか？」と尋ねられ、またどぎまぎしながら「いえまあ、ちょっと英語ぐらいは」と答えたら「あ、そう」とまた云われた、今度も持って来た時の何十倍の重さを感じながら帰ったあの日。しかし、卒業制作の時には、観てもらうために、6点の作品を持参する日を伺いにいったら、「いや、大きくて大変でしょうから、わたしがあなたの下宿に行きます。」と云われ、冬の寒い日に下宿まで来ていただき、二人で電気炬燵に入って並べた作品を、一点一点丁寧批評いただいた。「構図が、まとまらずはみ出すのなら、小さく纏めようと思わないでどンドン上下左右にキャンバスを広げていけばいい。」という言葉と「油絵具は三脚が倒れるくらいにくっつけていかなければ。」という言葉が今も残っている。

また、先生はその時に、今まで何故具体的に絵の批評をされなかったのか、という理由を話された、「先生の立場でこの部分がよい、とか悪いと、まだ形成途上の人にいい過ぎれば、生徒はその言葉によって、自分の表現を失うかもしれない。ましてや、始めたばかりの人にどうこう云えば、決定的な、良くない影響を与える事もありうる。その人が何か思って描いたものをこの部分は無い方がいいね、とかこの色は別の色のほうがよい、などと云うのは、場合によっては失礼千万なことだと思う。卒業制作は何年かの制作の総決算でその人のものをある程度創りあげてきた後だから、対等に話ができる。問題も提起できます。」と説明された。卒業後も遠路はるばる仕事場に来ていただいて観ていただいたこともあった。

先生は普段物静かに話され、厳しい人ではあったが怒りを見せられることはまずなかった。たった2度あり、最初は作品の講評会の際に、沢山の作品が置かれていて、その一つを、ある学生が足で動かした時、「君はここに居る資格がありません。すぐ出て行ってください。」と、静かでしたが容赦しない語気で云われ、一同さっと緊張した。その学生が出て行くと、元の語調になり、講評を淡々と進められた。もう一度は、ガラス絵の授業で私をはじめ何人かが興味をもてなくて、やや粗雑な汚れた仕事をした時、「制作を大事にしない制作者は、作家の資

格はありません。と痛烈に云われた。何であれ、先生は云うだけでなく実践されていて、学生と同じに中国語講座を受講され、試験まで受けられたり、自身でアラビア語も勉強されていた。身なりのことでは、ある日突然、坊主頭に羽織、袴の姿で講義に来られ驚かされたり、白のスラックスにピンクのシャツの軽装で彫塑室に入って来られ、「首というものは、こうして造るんだ。」と、あっと云う間に塑像を造られ、「粘土が大事だ。しっかり練りあげて良い粘土を作れば制作の三分の一は出来上がったことになる。」と云われた。よれよれのレインコート姿は言わばコロボスタイルの先駆者で、一番馴染みの恰好だった。その格好で制作室の私たちのところへ来て、「今、女房がこどもを生んでるんですよ。」と落ちつきなくうろうろと熊のように行き来されていた姿が、今でも焼き付いている。

私たちには、「こどもは早くつくりなさいよ。二十歳前後が身体のピーク、絶対体力、知力の最高な子ができる。」と云いながら、自身は35才までにと5ヶ年計画で3人の男の子をもうけられた。3番目の時は、必勝「女」という意気込みで大きな紙にでかい字で女の子の名前が命名されていたが、またしても男と、がっかりされていた。

酒・・・これが命とりになったと思うが、とにかくよく飲まれた。先生の先生鶴三は、中里介山の「大菩薩峠」の挿し絵や直木三十五の諸作の挿し絵で有名な彫刻家で大酒豪だったらしく、愛弟子としてしっかりその洗礼をうけられ、私たちに引き継がれた。

先生宅には、一升壇をぶらさげてよくお邪魔した。それも夜遅くの訪問が多かったが、いつもそんなことは構わないよ、といった調子でお相手をしてくださった。奥様もいつでもころよく、酒肴を運んでくださっていたが、深夜になると時折別室で柱にもたれて座ったまま、うつらうつらされているのを見て、大変気が引けたものでした。芸術とはなんぞやという男どもの戯言を理解されていたものか、厭な顔ひとつされなかった。このことを今思い返すと、先生ご夫妻のようにすることが如何に難しいか分かってきて、ご迷惑をおかけしたことを悔やまないではいられない。

先生の酒の席で話は多義に涉っていて、縦横無尽に広がるのが常だったが、なかでも先生の師、石井鶴三次いで萩原守衛（碌山）のことが多く、守衛については「文覚」の世界という論文も書かれていて、碌山美術館を観るようにと云われ、見に行ったことがある。他に、南宋の絵画、印度の美術、イスラム美術のことが、よく触れられた。

また、留学の時には、ファッチーニの弟子になっておられた小野田さん（この方は芸大で女傑と云われたらしい、というのは上野芸大祭名物の火祭りで、どんちゃん騒ぎの大暴れしている内に、筵のようなものを纏って踊っていた彼女に火がついて、かちかち山のたぬきのようになり、池に飛び込みことなきをえたが、背中におおやけどをしたという。こんな逸話を聞か

れていたものでローマでお会いした時、どんな人かと恐れていたけれど、小柄でふくよかな素敵な人だった。「この頃、歩いていても、めっきりローマっ子が声をかけてくれなくなって、寂しいわー。」とにこやかに話され、合気道を教えて生計をたてている、とも云われた。ミラノ在住で既に著名な彫刻家の吾妻兼次郎氏、豊福知徳氏等にも紹介していただいたりした。報告の手紙をイタリアから出したら、「私に手紙を書く暇があったら、本の一冊でも読むか、制作にはげみなさい。」と返事が返ってきた。

先生と最期に会ったのは2年前、先生を囲んで仲間たちと5時間ほど飲みっぱなしであった。先生は少し太られていたが、以前のように元気にはお飲みにはならず、十分の一位に薄めた酒を、ちびりちびりとやりながらお相手をしてくださった。そして、最後のお声を聞いたのは、去年後輩の友人たちと倉敷で飲んだ時、先生に電話しようとする事になり、くだらない事をごちゃごちゃ話したら「相変わらずだねー」と笑っておられた。



一 香川源氏会 (セウツウ)
 1972年頃の展示会
 智恵のキツケに似た。
 大衆の時の展示会

左端が「おん」NHK、
 美術担当 智恵君
 右端 洋田。